

流離譚（企画展示） 第二回

安岡の家(お下)の系図には、お西の文助が書いた安岡系圖書、文助の兄源右衛門の先祖書があります。流離譚の新潮連載第二回に記載されている安岡系圖書など系図関連を検証します。

新潮連載第二回の始まりは次の通りです。

しかし、じつのところ私には、田舎の墓地の話は何べん聞かされみても、よくわからない。・・・一番古いのは有岡山の墓地で、ここに安岡覚兵衛正治とその子佐五右衛門正直の墓がある。

岡芝の墓地が挙げられていない。そこに安岡の家で一番古い元禄九年卒の安岡武左衛門(覚兵衛正治の父)の墓標があります。下は武左衛門の墓標の拓本です。墓標は楷書体で刻まれています。この墓は草書体で刻まれています。家の墓標で草書体は子の墓だけです。

流離譚には続いて次の記載があります。

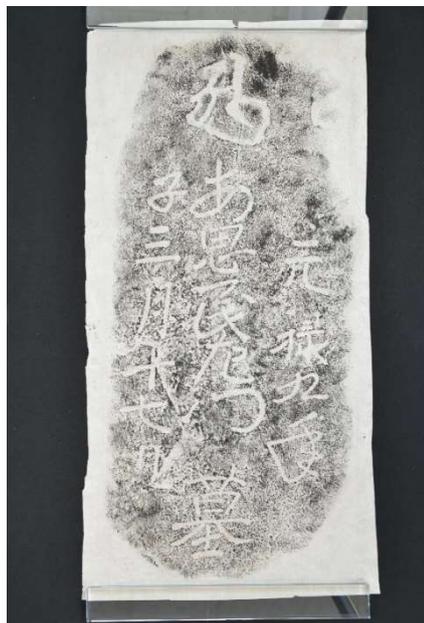
文助は、日記の他に「安岡系圖書」といふのを残してある。五十ページばかりの和綴の本になってゐて、同じものが三部つくられたらしく、そのうち一部がお下の家に伝はつてゐる。・・・安岡源左衛門行正→永禄元戊午年(一五五八)生、文禄五丙申年(一五九八)卒というふのが出てくる。

文助は安岡系圖書を手元に置き、明治に入っても書き足していません。文助日記とともに四坊の安岡に昭和四十五年以降に預けられました。文助は安岡系圖書を三部作っていないので、流離譚の三部作成の記載の理由は不明です。

「安岡源左衛門・文禄五丙申年卒」とありますが、安岡系圖書には「文禄五庚子」とあり異なっています。系圖書の記載は干支と年の組み合わせが正しくありませんので、流離譚は記載を意図的に年と干支が整合とれるように変えたのでしょうか。干支「庚子」は文禄五年近辺では慶長五年(山内一豊が土佐国主となった年)となります。安岡源左衛門の死去時期について新潮連載の第三回に次の記載があります。

・ 謀略にかかつて相撲見物にやつてきた不逞の一領具足たちは、まことに哀れな最期を遂げたわけであるが、・・・地元民の山内家に対する不信の念は一層つのつたものと思はれる。・・・安岡源左衛門行正は文禄五年に死亡となつてゐるが、これは偶然のこととは思へない。・・・僅かばかりの田畑を耕しながら逼塞してゐた男は、やはり「文禄五年死亡」としておくのが一番妥当な方便であつたであらうとあります。

この方便、山内に逆らい一領具足として慶長五年に戦い死亡したのではなく、農民として人生を全うした方が自然の流れだと読むのだろうか。



安岡の家 最古(元禄九年)武左衛門

戦いの前に源左衛門は、家の存続のため喜三郎に系図を持たせ山北に逃がし、系図は息子武左衛門に引継がれたが火災に遭い焼失しました。焼失した系図を源左衛門から六代目文助は必死に探索し作成したのです。流離譚では文助は何に基づき安岡系図書を書いたか不明となっております。

安岡系列で最初に郷士になった喜三郎の曾孫「佐五右衛門」は藩に先祖書を提出しています。この資料は現在不明ですが、文助が系図を作成する際にこれを見たと思います。文助作成の系図書の源左衛門卒の箇所に取消線(取消内容不明)があり、作成に当たり試行錯誤があったことが窺えます。文助の兄の作成した先祖書には「大通院様御入國以後浪人ニ而在之候」とあるのみで卒年について記載はありません。

流離譚に源左衛門の記載の続きに地名「一品経」について記載されています。

「一品経」といふへんな名前だが、どうやら地名であるらしく、「夜須庄地検帳」や「秦土録第二目録」に当つて、安岡源左衛門の名をみとめたのであろう。文助は、それだけでは満足せず、天保九年、安岡利弥太を誘つて一緒に夜須村に源左衛門の墓を探索に出掛けた。しかし、いくら探しても源左衛門の墓も、一品経といふ場所も探しあてることが出来ず、地下役人に訊ねたところ、役人共は、

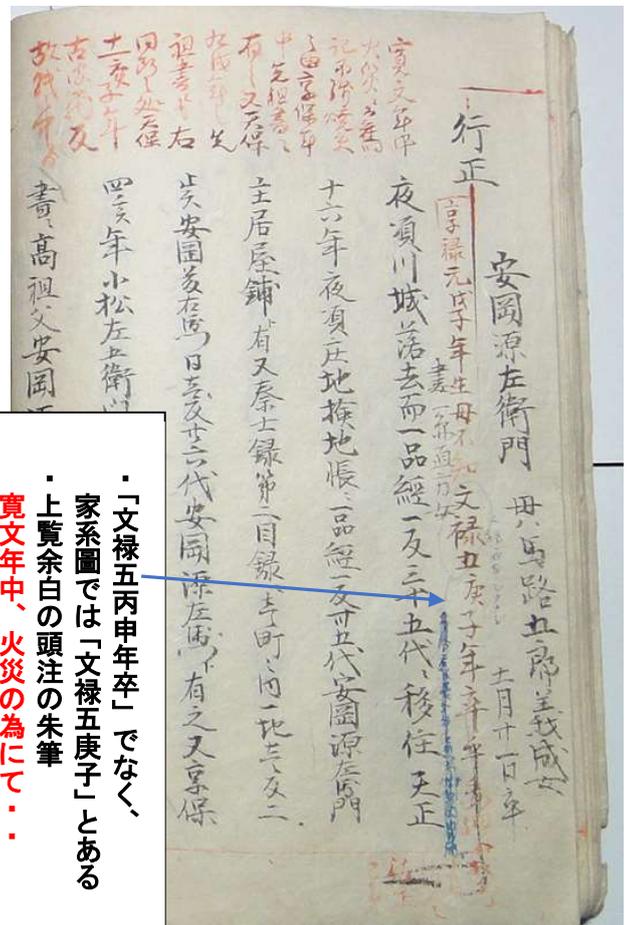
「おほかた宝永四年の津波にさらはれて、墓も土地も流れてしまひましたらう」とこたへた由。文助はがっかりしたが、なほ諦め切れず、夜須庄八幡宮に立ち寄つて・・

・・・文助がこのやうに熱心に先祖のことを検索したといふこと自体に興味がある。・・・しかし文助が、古い反古紙をひろげて、そこに書き遺された名前が何処でどう自分につながるかを何とか解き明さうとする熱情は、体温のやうに私に伝はつてくる気がするのである。

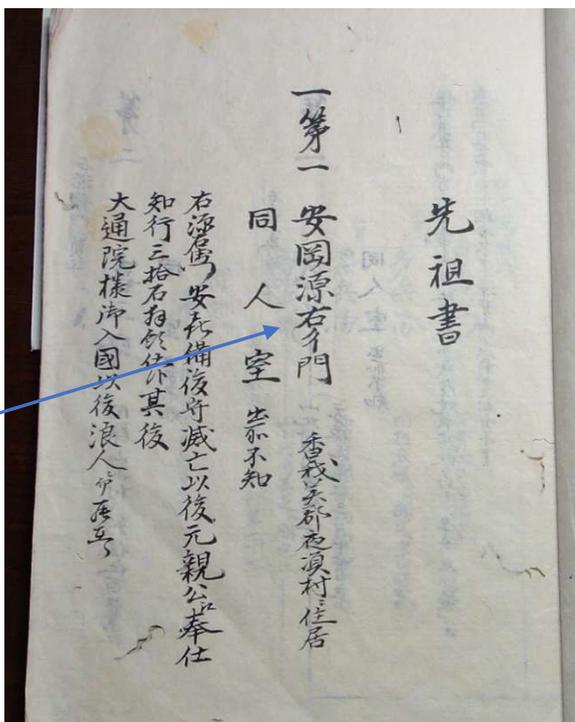
流離譚では取り上げられていませんが、文助の兄源右衛門の先祖書、安岡の家関連の郷土職の届出で藩に提出する先祖書では、源左衛門でなく源右衛門と書かれています。文助(亀吉)が提出した郷土届の先祖書でも源右衛門です。これは安岡平八正久の郷土届の記載を引き継ぐことにした方便か。安岡の家最初の郷土佐五右衛門が出した先祖書を見たいものです。

夜須の郷土史家が一品経の場所を上夜須のホノギ図から特定しました。

*提供を受けた資料掲載スペースの都合で一部変更しています。



・「文禄五丙申年卒」でなく、
家系圖では「文禄五庚子」とある
・上覧余白の頭注の朱筆
寛文年中、火災の為にて・・



先祖書は先頭の名が家系圖と異なり
安岡源右衛(衛)門となっている。

長宗我部地檢帳（夜須庄編）に安岡源左衛門の名で檢地されている土地

大モン同し北	大門村	徳成名	安岡源左衛門	下屋敷	一所25代	出40代2分	
同	大門庄左衛門屋敷付	徳成名	安岡源左衛門		一所17代3分		下々
大クホ	大窪村	庄堺名	安岡源左衛門		一所1反	出5分1勺	畠田
同	大窪村	庄堺名	安岡源左衛門		一所1反	出7代1勺	中
同	同村	同名	同し給		一所42代4分		中
執行西ノ谷		庄堺村	安岡源左衛門		一所1反40代		中
カラ草谷	同	庄堺名	安岡源左衛門		一所20代		下荒
一品経	森之村	同名	安岡源左衛門	上屋敷	一所30代	出1反5代1分1勺	

以上のように、長宗我部地檢帳に安岡源左衛門の名の土地が檢地されている。これをホノギ図に当てはめると次頁のようになる。

文助と弥太郎の墓探し

墓の探索も流されたとして断念していますが、寛永年代まで現在ある墓標の墓はなく、埋葬した箇所を示す石グロと線刻地蔵などが置かれていました。文助が弥太郎と墓を探しに行き地下浪人に流されたと言われたとの記述は気になります。墓がないこと、当時、墓標がないこと、当たり前ではなかったのか。安岡の家に左の線刻地蔵、観音があり明治に記載された絵図に「古墓」と記載されています。時代的に喜三郎夫婦の埋葬場所と推測しています。



石垣の上の線刻観音と地藏

安岡源左衛門の住んでいた安岡源左衛門の給地、主居などの所有地として検地されているところを表したものです。上夜須上夜須のホノギ名図

